

# 本 論

## 第 I 部 中央アジアにおける仏教図像と經典

### はじめに

本論文の第 I 部 中央アジアにおける仏教図像と經典では、第 1 章『法華經』より見た神變像、第 2 章『觀無量壽經』による大神變図、第 3 章 四天王の奉鉢と弥勒、第 4 章『華嚴經』ヴァイローチャナ仏の関わりの 4 章により、中央アジアにおける仏教図像と經典の関係を考察している。

中央アジアにおける仏教図像の研究は、西暦 1922 年パリ大学のアルフレッド＝フーシェ教授が、アフガニスタンのアマヌラ＝ハーン国王に招かれ、この国の仏教遺跡の学術調査を開始して以来のことである<sup>1</sup>。中でも旧カピシ国の都城とされるベグラムの発掘には目を見張るものがあった。そして、この都城を中心として、周囲にいくつかの仏教遺跡が発掘され、この地方独特の様式をもつものとして注目された。(図 1-1 地図) たとえば、現パリ、ギメー東洋美術館所蔵の「舎衛城の大神變」(パイターヴァ出土、図 1-2) や、カーブル博物館所蔵の「燃灯仏授記(本生譚)」(ショトラク出土、図 1-3) は、その代表的なものである。

この舎衛城の大神變と比定される第一の場合は、フーシェ教授の後継者、ギメー博物館の館長アッカ博士により報告され、第二の場合は実際の発掘に当たったジャック＝ムニエ氏により、燃灯仏本生譚の類例として報告されている。だが、これらの図像に対してはこれまで仏伝を中心とする初期仏教經典に基盤を求めていく傾向があり、大乘經典からの見直しはあまりなされていないことが挙げられる。第一の主題としての舎衛城の大神變にみられる大神變とは、双神變を含む仏陀の神通力によるさまざまな変化の大神變の略称であり、数多くの仏菩薩がそこに出現することからみて、釈迦牟尼仏の大乘説法を意味するという指摘があり、これがその端緒を示すものである<sup>2</sup>。

また、第二の主題としての燃灯仏授記は、燃灯仏が授記のためにとくに創出された仏であり、これは授記の重要性を強調する点にポイントが置かれ<sup>3</sup>、さらに授記という儀式の中に未

---

<sup>1</sup> フランス考古学派遣団による 1922-1939 の主な発掘事業ほか、各文献は本文脚注を参照されたい。

<sup>2</sup> 小谷仲男「ガンダーラ仏教美術の展開」(『史林』50-1, 1966, p.88-104), 宮治昭「舎衛城の神變」(『東海仏教』16, 1971, p.40-60)。

<sup>3</sup> 小野玄妙『仏教の美術及び歴史』1916, (『小野玄妙仏教芸術著作集』2, 開明書院, 1977, p.359-360 所収), 平川彰「仏伝とくに燃灯仏授記と菩薩の觀念」(『初期大乘仏教の研究』春秋社, 1968, p.60-73)。

来の仏として認定するという働きのあることが指摘されている<sup>4</sup>。したがって、第1章においては、以上の背景をふまえてカピシ流派の中に自ら大乘教の経王を名乗る『法華経』の、品々上に対応するいくつかの図像を明らかにすることを目的に考察を行っている。

第2章は、1909年A.フーシェが、一連のガンダーラ浮彫について『ディヴァーヴァダーナ』第12章のシュラーヴァステイー（舎衛城）の偉大な奇蹟を表わしたものと解した点に基礎があり<sup>5</sup>、1911年D.B.スプナーはこれらを阿弥陀如来を示すと指摘し<sup>6</sup>、1926年わが国の源豊宗は、蓮池上に出現する仏陀は西方浄土の光景と解すべきだとし<sup>7</sup>、1950年樋口隆康氏は、中尊周囲に多数の仏菩薩のある浮彫は『観無量寿経』の阿弥陀真身観に当たると指摘した<sup>8</sup>。

1957年H.インゴルト氏は、多数の菩薩の出現で仏陀の特異な力が示されていることで、本図（図1-8）上段左右の仏陀（1,10）の左右に各4体の仏陀を出現させる図様は、多仏の強調という大乘仏教の教義を表わすものと指摘した<sup>9</sup>。

10年後の1967年、J.M.ローゼンフィールド氏は、本図を含む一連の浮彫について大乘経典の『解深密経』や『法華経』に説く菩薩・大衆に囲まれた釈尊が説法を始める光景、あるいは『大品般若経』等による三身説にもとづく応化身の出現とした<sup>10</sup>。同年、高田修氏は本図に対して、ジョーリアン小ストゥーパの中で迦葉と釈迦と記された例から、これらが過去仏を扱っているのだからここに大乘的内容を求めることは難かしいとしたが、後年大乘の一つの経典の説相を説いた経変の先駆的なものと述べて態度を変えた<sup>11</sup>。

1971年、小谷仲男氏は本図類似のレリーフに対して、阿弥陀信仰の造像としては飛躍があり釈迦仏の大乘説法図であろうとし<sup>12</sup>、同年、宮治昭氏は「舎衛城の神変」に関する経典の記載から本図本尊の白毫の光に注目して、説話の次元にあってなお唯一の仏陀から多数の仏陀への転換を示す一つの世界で、大乘経典の『摩訶般若波羅蜜経』の序品などが参考になるとした<sup>13</sup>。

---

<sup>4</sup> 干潟龍祥「菩薩思想の起源及び発達と本生経類の関係」(『本生経類の思想史的研究』東洋文庫,1954, 山喜房仏書林再版,1978,p.71)。

<sup>5</sup> A.Foucher, Le grand miracle Srāvastī, *Journal Asiatique*,1909., The Great Miracle at Srāvastī, *The Beginnings of Buddhist Art*,Paris-London,1917,pp.170-4.

<sup>6</sup> D.B.Spooner, Excavations at Takht-i-Bahi, *Annual Report Archaeological Survey of India*, 1907-12,p.143.

<sup>7</sup> 源豊宗「浄土変の形式」(『仏教美術』7,1926, p.68)。

<sup>8</sup> 樋口隆康「阿弥陀三尊像の源流」(『仏教芸術』7,1950, p.112)。

<sup>9</sup> H.Ingholt, *Gandhāran Art in Pakistan*, New York,1957,pp.121-3.

<sup>10</sup> J.M.Rosenfield, *The Dynastic Art of the Kushans*, Berkeley & Los Angeles, 1967,pp.236-8.

<sup>11</sup> 高田修『仏像の起源』(岩波書店, 1967,p.263),同『仏像の誕生』(岩波新書,1987, p.129)。

<sup>12</sup> 小谷仲男「仏教美術の東方伝播」(『東西文化の交流』平凡社,1971, p.66)。

<sup>13</sup> 宮治昭「舎衛城の神変」(『東海仏教』16,1971,p.57),同『涅槃と弥勒の図像学』(吉川弘文

1980年、J.C.ハンチントン氏は1977年にマトゥラーで阿弥陀仏の台座銘が発見されたことを引金に、本図も阿弥陀浄土を表わしているとした。本尊が転法輪印を結び、舎衛城の物語に合わないことなどがその理由である<sup>14</sup>。同年、静谷正雄氏は、ガンダーラ美術における阿弥陀信仰の一例として、サフリバロール出土の「憂填王造像浮彫」を取り上げ、この物語を記す『作仏形像経』では、造像の後阿弥陀仏の国土へ生まれるとあるので、この時期のガンダーラ後期（300年前後）に阿弥陀信仰があると主張した<sup>15</sup>。

1982年、J.ブラフ氏により「ブッダミトラの観音と阿弥陀」と解説された刻銘三尊像（アメリカ個人蔵、図1-9）が示され<sup>16</sup>、論争が続いている。

本章では、大乘仏教の図像との関係を探り『観無量寿経』による観想の第6観から第10観の記述がこれに対応すること。そしてその後の第11観から第16観までの記述も当てはまることを明らかにしている。とりわけこの經典中の「修多羅（經典）と像想を結びつけよ」とある記述が決め手となっている。

また、ガンダーラ・サフリバロール出土の三尊像が、上節の考察から導き出された大乘仏教と関わることについて検討し、三尊形式が浄土經典では成立当初に遡ると指摘されていること、また菩薩像の多くが弥勒像と同じ形であることを『観仏三昧海経』で述べていることなどが、図像解明に大きな鍵を握っていると指摘している。

第3章は、桑山正進氏の『法顕伝』や『大唐西域記』等の記事から、インドとガンダーラでは人種や風土の違いがあり、ガンダーラに仏鉢の存在した可能性があるとの指摘が発端である<sup>17</sup>。その主な論点は、ガンダーラが罽賓であること。また、仏鉢を見た人物が5世紀前半の人々に限られていることなどであった。この桑山氏の考察をふまえて、ガンダーラ浮彫の仏鉢表現が、經典上どのような記述と結びつくかを考え、何を意図したかを明らかにすることがテーマである。

この仏鉢図は『太子瑞応本起経』に記す四天王の奉鉢記事と相応し、その後変遷をたどり、説話として途切れなく仏典に記載され増幅されていくこと。

一方、チャンディガル博物館所蔵の「弥勒菩薩・大神変図・仏鉢供養を表すガンダーラ浮彫」を見ると、『般舟三昧経』で説く、兜率天上の弥勒（上段）と阿弥陀仏浄土（中段）の組み合わせとする指摘から、これらを未来仏（弥勒）と現在仏（阿弥陀）として理解すること

---

館,1992, p.273)。

<sup>14</sup> J.C.Huntington, A Gandhāran Image of Amitāyus' Sukhāvātī, *ANNALI*/Vol.40, Napoli,1980, pp. 651-72. 台座銘については、中村元「新発見の阿弥陀像台座銘とその意義」(『ブッダの世界』学習研究社,1980.)を参照。

<sup>15</sup> 静谷正雄「クシャーナ時代の西北インドの仏教」(『仏教の歴史と文化』同朋社,1980,p.23), 高田修『仏像の誕生』(上掲注11, p.3-5)。

<sup>16</sup> J.Brough, Amitābha and Avalokitesvara in an inscribed Gandhāran sculpture, *Indologica Taurinensia*,Vol.10,1982,pp.65-70.

<sup>17</sup> 桑山正進「罽賓と仏鉢」(『展望アジアの考古学』新潮社,1983,所収)。

で納得がいくこと。すなわち釈迦仏を中心としないという視点がここにあることである。これを裏づけとして、本章では仏鉢とともに造像される仏陀が、釈迦の遺法を受け継ぐ弥勒仏としての可能性の高いことを明らかにしている。

第4章では、これまでのバーミヤーン研究史において、6世紀中ごろにインドと中国を結ぶ交通路に大きな変化があったこと（桑山説）、絵画様式の主題や図像の比較研究から（宮治説）、また歴史の概観等（クランバーク説）で、大筋においてバーミヤーン石窟全体が6-8世紀に絞られるという指摘が出発点である<sup>18</sup>。これをうけて二大仏（図1-32,1-33）を6-7世紀とする説について確認をしている<sup>19</sup>。

そして6世紀に当地を支配する初期突厥（チュルク）の関わりについて、漢文文献や、碑文、東ローマの史料等で検討し、その結果、6世紀後半の突厥ディザブロス（室点密）の関わりと、突厥の受容した華嚴教と、主尊毘盧遮那（ヴァイローチャナ）仏を見出し二大仏との関係を論じている。また壁画に辮髪姿の仏菩薩が描かれ、チュニクの供養者やリュトン等、塞外民族としての突厥の関わりのあることを明らかにしている。

また、キジルの石窟でも辮髪姿の仏菩薩が見出されることから、両者の関係性を明らかにしている。

以上、本論文の副題に掲げた図像と経典の関係とは、これまで仏教美術の作品を見て仏教の図像であることを承知しながら、その根拠となる仏典についてあまり気を配らなかったことに注目したことを意味し、第1部1-4章は、いずれもこの経典と図像の関係を検討し、解説の得られた内容を明らかにしたものである。

---

<sup>18</sup> 宮治昭『バーミヤーン、遙かなり』（NHK ブックス、日本放送出版協会、2002、p31,54）、D.Klimburg-Salter, *The Kingdom of Bāmiyān : Buddhist Art and Culture of Hindu Kush*, Rome-Naples, 1989.

<sup>19</sup> 宮治昭「バーミヤーン研究史」上、下、（『名古屋大学文学部研究論集』69,1976、『弘前大学教養部文化紀要』12-1,1978）参照。以下各説については本文と脚注を参照されたい。